

祝 登別温泉開湯150年特別企画

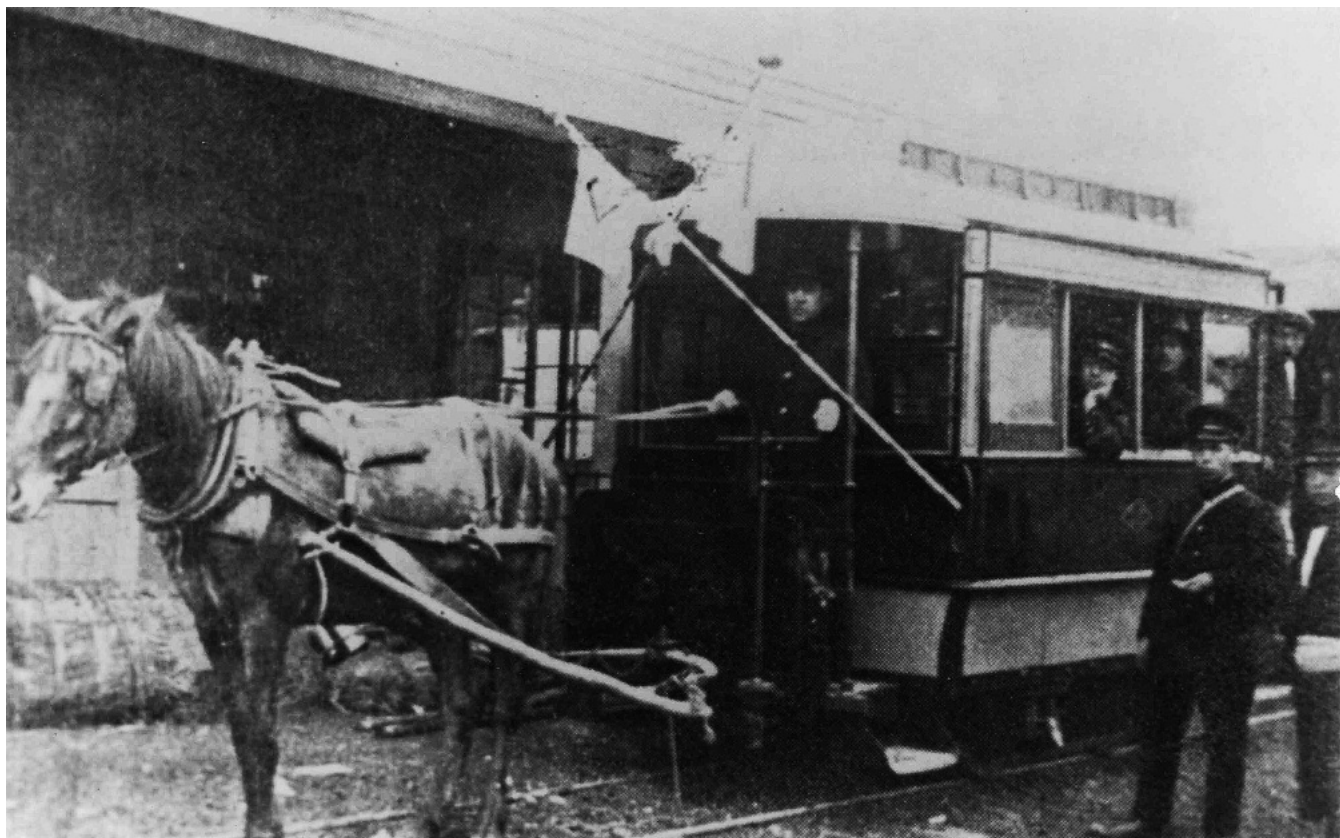
湯のまちに住む



今年、開湯150年を迎えた登別温泉は、多くの観光客が訪れる日本有数の温泉地です。

登別温泉の繁栄には、交通機関の発展や道路網の整備、多種類の泉質と豊富な湯量などが考えられます。

今月号では、登別温泉に向かう交通機関の発展や登別温泉の泉質などをお知らせします。



▲大正4年当時の馬車鉄道

登別温泉が世に知られる

登別温泉が世に広く知られるようになったのは、今から150年前の江戸時代末期。幌別場所の請負人岡田半兵衛が、道路を開削し、止宿所（共同浴場）を建て、滝本金蔵が湯守（温泉の管理人）となった1858年（安政5年）と言われています。

岡田半兵衛がこのときに開削した道路は、登別小学校通りから中登別町のコンビニエンスストア前になる道路でした。

それまでは、登別温泉に行く道らしきものがなく『川を北上』との記録があるほどで、仮に道があったとしても、それは『けもの道』のようなものだったと思われる。

登別温泉までの道路が開通

湯守となった滝本金蔵は、明治14年に温泉利用客の利便性を図るため私費を投じて紅葉谷の上を通る道路を開削。登別温泉までの道路が開通しました。この開通により来泉客が増えたため、滝本金蔵は明治22年に新たに2階建ての湯宿を建て、翌23年にはこれまでの外湯だけから湯宿を建て増して内湯を設けました。

客馬車が走る

明治24年には、滝本金蔵が必死の思いで開通を願った馬車道が4年間をかけて完成。この間、豪雨出水な